

# 教師の思い出、家族の思い出に対する自伝的推論

—— 教職志望、世代との関連 ——

佐藤 浩一

群馬大学大学院教育学研究科教職リーダー講座

(2014年9月17日受理)

**Autobiographical reasoning to memories of teachers and families :**  
Effects of the motivational orientation towards the teaching profession and the generation.

Koichi SATO

Program for Leadership in Education, Graduate School of Education, Gunma University

(Accepted on September 17th, 2014)

## 1 自伝的推論

人は過去の経験や出来事を思い出すだけでなく、そこに何らかの意味づけを行うことがある。この意味づけを通して、過去と現在のつながりを確認したり、複数の出来事を因果論的に結びつけて解釈したり、将来に向けての行動指針を引き出したりする。こうした思考過程は自伝的推論 (autobiographical reasoning) と呼ばれる (Bluck & Habermas, 2000, 2001; Habermas, 2011; Habermas & Bluck, 2000; Singer & Bluck, 2001)。

自伝的推論の意味するところは広く、自伝的推論に該当する思考過程は、高齢者の回想 (野村, 2008)、ライフストーリー (Bluck & Habermas, 2000, 2001; McAdams, 2001; やまだ, 2013)、ストレスフルな経験に対する意味づけ (堀田・杉江, 2012, 2013; 川島, 2008; Park, 2010)、心的外傷後成長 (Calhoun & Tedeschi, 2006; 宅, 2014)、自伝的記憶の機能 (Harris, Rasmussen, & Berntsen, 2013; 落合・小口, 2013; 佐藤, 2008) など、様々なテーマの元で検討されてきた。また、その検討方法も、評定法を用いる場合 (例: Berntsen & Rubin, 2006) と、内容分析を用いる場合 (例: McLean & Pasupathi, 2011) があ

る。

佐藤 (2014) はこうした多様な先行研究で検討されてきた思考過程を整理し、自伝的推論の「内容」と「過程」に分類し、表1の枠組を提案した。自伝的推論の過程は、その出来事や経験について想起したり、意味を考えるプロセスである。これは経験直後の侵入的な思考やリハーサルと、その後の意図的な熟考に分けられる。自伝的推論の内容は、リハーサルや熟考を通して得られた意味づけの内容である。これは、「自分にとって重要である」という概括的な認識、「その出来事が自分に影響したり自己を定義することで自己とつながっている」という認識、「複数の出来事がテーマや因果連関によって結びついている」という認識、の三つに分けられる。

本研究は、佐藤 (2014) の提案した枠組を用いて、職業選択における動機や参加者の世代と自伝的推論との関連を検討することを目的としている。この関連について佐藤・清水 (2012, 2013) は、大学生と30～50歳代の現職教員、高齢者 (平均69.0歳) を対象に、教師とのコミュニケーション経験の想起を求め、自伝的推論を検討する8項目を含む記憶特性質問紙に回答を求めた。また大学生には現時点での教職志望の強さを、現職教員には大学時点での教職志望の

表1 自伝的推論を整理した枠組および本研究における因子分析結果との対応

佐藤 (2014) の枠組	該当する因子	
(1) 自伝的推論の内容		
1 自分にとっての意味・重要性	重要	
2 出来事と自己のつながり		
2-1 自分に影響した		
2-1-1 自分を成長させた	教訓・成長	
2-1-2 自分の考え方に影響した	教訓・成長	
2-1-3 学んだ	教訓・成長	
2-1-4 自分に否定的な影響を及ぼした		
2-1-5 出発点、転機、アンカーになった	転機	
2-2 自己を定義する		
2-2-1 今の自己とつながる	教訓・成長	現在の自己
2-2-2 私を表す	現在の自己	過去の自己
2-2-3 アイデンティティに関わる	現在の自己	
3 出来事と出来事とのつながり		
3-1 テーマを共有する		
3-2 因果連関など		
(2) 自伝的推論の過程		
1 直後の侵入的な思考やリハーサル	リハーサル	
2 意図的な熟考	リハーサル	

強さを回答させた。その結果、以下のことが明らかになった。

- (1) 大学生でも現職教員でも、教職志望の強い（強かった）人の方が、教師の思い出に対して活発な自伝的推論を行っている。
- (2) 世代の効果は部分的にしか認められなかった。すなわち、大学時代に教職志望を有していた人に限定すると、20歳代よりも50歳代の方が、自伝的推論が活発であった。しかし30～50歳代の参加者全体で見ると、世代の効果は有意ではなかった。また大学生と高齢者を比較しても、世代の効果は見られなかった。

本研究では、佐藤 (2014) が提案した枠組に基づいて質問紙を作成し、自伝的推論を検討する。その際、どの参加者にも回答が可能で、かつ、ほぼ毎日欠かさず接していた対象に関わるものとして、中学時代の教師の記憶と家族の記憶を想起してもらう。複数テーマの記憶について検討することは、本研究で得られた知見の信頼性を高めるのに有効であろう。参加者は佐藤・清水 (2012, 2013) と同様に、大学生と30～50歳代の現職教員である。

本研究の第一の目的は、佐藤・清水 (2012, 2013) よりも詳細な質問紙を用いて、教職志望と自伝的推論との関連を検討することである。佐藤・清水 (2012, 2013) と同様に、教職志望の強い（強かった）人の方が、教師の記憶に対して活発な自伝的推論を示すであろう。

第二の目的は、世代と自伝的推論との関連を検討することである。この関連についてこれまでの研究では、一貫した知見は得られていない (表2)。先行研究では、加齢に伴い自伝的推論が活発化するという報告もあるが (例：Pasupathi & Mansour, 2006)、一方で、世代による差が認められないという報告 (例：McLean, 2008；佐藤・清水, 2012, 2013) や、若い世代の方が自伝的推論を活発に行っていることを示唆する報告もある (例：Bluck & Alea, 2011)。

第三の目的は、想起された出来事感情価、想起時点での感情強度と自伝的推論との関連を検討することである。心的外傷後成長に関するモデル (Calhoun & Tedeschi, 2006) では、ストレスの程度が高いほど、その経験を繰り返し想起したり、その意味を求めようとする傾向が強まり (これは本研究での

表2 自伝的推論における世代の効果を検討した研究例

研究	世代	自伝的推論の内容	研究法	自伝的推論の程度における世代の効果
Bluck, S., & Glück, J. (2004)	15～20歳、 30～40歳、 60～70歳	経験から教訓を学んだ。	内容分析	[30～40歳] > [60～70歳] > [15～20歳]
Pasupathi & Mansour (2006) 研究1	18～86歳	転機あるいは危機の経験が、自己の特性と結びつけて語られる。	内容分析	・転機の経験では世代差は無い。 ・危機の経験では、60歳頃まで増加し、その後は安定あるいは減少傾向。
Pasupathi & Mansour (2006) 研究2	18～89歳	他者に話したことがある経験が、自己の特性と結びつけて語られる。	内容分析	65歳頃まで増加。それ以降は、参加者数が少ないため不明。
Pratt, et. al. (1999)	18～26歳、 28～50歳、 60～75歳	道徳的に重要な出来事から、自己、正義、友情、等について学んだ。	評定法	世代が上の方が自伝的推論が多い。
McLean (2008)	17～35歳、 65～85歳	自己定義記憶が自己の特性と結びつけて語られる。自己を省察する表現が用いられる。	内容分析	世代による差は無い。
佐藤・清水 (2012, 2013)	19～24歳、 32～39歳、 40～49歳、 50～58歳、 61～89歳	教師の思い出を「意味がある」「今の自分とななる」等と評定。	評定法	世代の効果は部分的（本文参照）。
Bluck & Alea (2011)	平均 22.5 歳の若年群と 73.7 歳の老年群	「自分が過去の自分と同じ人間であると確かめたいとき」や「自分の価値観が変わったか知りたいとき」などに過去を振り返る程度。	評定法	若年群の方が自伝的推論が多い。
落合ら (2013)	20～29歳、 30～39歳、 40～49歳、 50～59歳	「過去の失敗から学びたいとき」や「悪いことから教訓を学べると感じる時」などに過去を振り返る程度。	評定法	20歳代 > 40歳代、50歳代

「自伝的推論の過程」に該当する)、そのことが成長をもたらす(これは本研究での「自伝的推論の内容」に該当する)とされている。強い感情を伴って想起される出来事は、活発な自伝的推論を引き起こすであろう。ただし自伝的推論を引き起こすのは必ずしもネガティブな出来事に限らない。佐藤・清水(2012)ではポジティブな出来事も自伝的推論を引き起こすことが指摘されている。

第四の目的は、自伝的推論とパーソナリティとの関連について検討することである。心的外傷後成長を検討する尺度 PTGI (Posttraumatic Growth Inventory) は、一種の自伝的推論を測る内容であり、本研究で用いる質問紙にも反映されている。PTGI と 5 因子性格検査得点の外向性や開放性との間には弱～中程度の相関が見出されている(玉腰, 2012; Tedeschi & Calhoun, 1996)。そこで本研究でも 5 因子性格検査の一つである日本語版 TIPI (Ten Item Personality Inventory) を用い、自伝的推論との関連を検討する。

## 2 方 法

### 1. 参加者

調査参加者は 19～20 歳代(以下「20 歳代」とする) 108 名(平均 19.9 歳、男性 31 名、女性 77 名)、30 歳代 105 名(平均 34.1 歳、男性 33 名、女性 72 名)、40 歳代 89 名(平均 43.6 歳、男性 37 名、女性 52 名)、50 歳代 92 名(平均 53.6 歳、男性 46 名、女性 46 名)であった。20 歳代の参加者は教員養成系学部の大学生であり、30～50 歳代の参加者は現職の教員であった。

### 2. 手続き

講義や講習会等で質問紙を配布し、回答を求めた。参加者は中学時代の教師とのコミュニケーションの記憶と、家族とのコミュニケーションの記憶を一つずつ想起し、学年と具体的な内容を記述した。

参加者は自分が想起した二つの記憶について、自伝的推論を検討する 26 項目(佐藤, 2014)と、記憶の鮮明度(「この出来事の記憶ははっきりしてい

る))、詳細度(「この出来事の記憶は詳細である」)、感情価(「この出来事が起こったときの記憶はよかった」)、感情強度(「この出来事を思い出している今の感情の強さはとても強い」という記憶特性4項目に、1~7の7段階で評定した。

続いて、大学生は現時点での教職志望の強さを、「非常に強い」、「やや強い」、「あまり強くない」の3段階で回答した。現職教員は大学時代の教職志望の強さを、「非常に強かった」、「やや強かった」、「あまり強くなかった」の3段階で回答した。

参加者は最後に、5因子性格検査として、日本語版TIPI(小塩・阿部・ピノ, 2012)に回答した。

### 3 結 果

#### 1. 因子分析

教師の記憶に対する自伝的推論に関わる26項目への回答に対して、最尤法、プロマックス回転を行い、因子数と解釈可能性から6因子解を採択した。6因子で全分散の67.0%が説明されていた。因子間相関は.169~.617の範囲であった。因子分析の結果を表3に示す。

抽出された因子は以下の通りである。(1) 教訓・成長因子(8項目、 $\alpha = .935$ 、例:この出来事から私は大切なことを学んだ)、(2) リハーサル因子(6項目、 $\alpha = .827$ 、例:この出来事が起こった当時、そのことが気になってしかたなかった)、(3) 過去の自己因子(2項目、 $\alpha = .933$ 、例:この出来事はその当時の私がどんな人間か多くを教えてくれる)、(4) 現在の自己因子(6項目、 $\alpha = .766$ 、例:この出来事は現在の私を非常によく表している)、(5) 重要因子(2項目、 $\alpha = .952$ 、例:この出来事は重要であると確かに思う)、(6) 転機因子(2項目、 $\alpha = .916$ 、例:この出来事は私の人生における転機だったと確かに思う)。なお、家族の記憶に対する評定に対して因子分析を行った場合も、ほぼ同様の因子構造が確認された。

佐藤(2014)の枠組に照らすと、リハーサル因子は自伝的推論の「過程」に、それ以外の5因子は自伝的推論の「内容」に該当する(表1)。

#### 2. 教職志望と教師の記憶

教師の記憶の鮮明度、詳細度、感情価、感情強度ならびに、各因子の平均評定値について、世代と教職志望による差異を検討する。各因子の平均評定値は、因子負荷量が.40以上のものを用いて求めた。

本研究では、20歳代の参加者(大学生)には、現時点での教職志望の強さを問い、30~50歳代の参加者には、大学時代の教職志望の強さを問うた。従って、「志望が強い(強かった)」ということの意味が、世代によって異なる。そこで世代ごとに教職志望の効果を整理し(表4)、志望の効果を1要因分散分析で検定した。

結果は世代によって異なるが、感情価、感情強度、教訓・成長因子、リハーサル因子、過去の自己因子、現在の自己因子に教職志望の効果が認められた。これらはいずれも、教職志望の強かった参加者の評定値が高かったことによる。すなわち、30歳代で教職志望が強かった参加者は、教師とのポジティブなコミュニケーションを強い感情を伴って想起し、現在の自己因子の評定値が高かった。50歳代で教職志望の強かった参加者は、やはりポジティブな出来事を想起し、教訓・成長因子、リハーサル因子、過去の自己因子の評定値が高かった。

#### 3. 世代と教師の記憶・家族の記憶

佐藤・清水(2012, 2013)より、教師の記憶に対する自伝的推論では、世代の効果は教職志望の強さによって異なる可能性がうかがわれる。そこでまず、教師の記憶の鮮明度、詳細度、感情価、感情強度、各因子の平均評定値について、教職志望×世代の分散分析を行い、交互作用が有意ではないことを確認した。そのうえで、教職志望をこみにして、世代の効果を1要因分散分析で検定した。結果を表5に示す。いずれの項目・因子においても、世代の効果は有意ではなかった。

教師の記憶と同様の分析を、家族の記憶に対する評定値についても行った。世代の効果を表6に示す。世代の効果は、現在の自己因子で見られた。これは50歳代の評定値が20歳代よりも高いことによる。

表3 因子分析の結果（最尤法、プロマックス回転、因子パタン行列）と因子間相関

因子名と各項目の質問内容	因子						共通性
	F1	F2	F3	F4	F5	F6	
<b>【F1：教訓・成長】 <math>\alpha=.935</math></b>							
この出来事から私は大切なことを学んだ	1.105	-.015	.026	-.181	-.113	-.043	.878
この出来事から教えられることはたくさんある	1.048	.079	.043	-.116	-.048	-.178	.846
この出来事は私を成長させたと確かに思う	.678	-.096	.064	-.036	.191	.060	.636
この出来事は私の性格や行動に肯定的な影響を強く与えた	.631	-.206	.056	-.073	.166	.196	.582
この出来事は物事に対する私の考え方や感じ方に強く影響した	.593	.128	-.039	.022	.135	.052	.610
この出来事と今の自分との間につながりが強く感じられる	.587	-.020	-.029	.300	-.017	.092	.696
この出来事は私が物事について考えるときの枠組みとなっていると確かに思う	.553	.085	-.141	.269	.032	.061	.640
この出来事は現在の私に強く影響している	.455	-.019	-.050	.057	.431	.081	.720
<b>【F2：リハーサル】 <math>\alpha=.827</math></b>							
この出来事が起こった当時、そのことが気になってしかなかった	-.055	.966	-.005	-.030	-.036	-.111	.768
この出来事が起こってから、そのことについて何度も考えた	.014	.841	.005	-.073	.059	.068	.787
この出来事が起こった当時、そのことについて何度も考えた	-.015	.813	.047	-.006	.026	.007	.693
この出来事にどんな意味があるのか何度も考えた	.151	.701	-.055	-.102	-.051	.220	.699
この出来事は私の性格や行動に否定的な影響を強く与えた	-.119	.345	-.011	-.055	.034	-.094	.093
この出来事が原因になって他の出来事を引き起こしたと確かに思う	.018	.274	.081	.119	.026	.252	.346
<b>【F3：過去の自己】 <math>\alpha=.933</math></b>							
この出来事はその当時の私がどんな人間か多くを教えてくれる	.012	.002	.912	.075	.001	.076	.947
この出来事はその当時の私を非常によく表している	-.035	.013	.835	.134	.028	.013	.811
<b>【F4：現在の自己】 <math>\alpha=.766</math></b>							
この出来事は現在の私を非常によく表している	.180	-.089	.095	.703	-.020	-.036	.648
この出来事は現在の私がどんな人間か多くを教えてくれる	.154	.015	.284	.653	-.107	-.091	.679
この出来事は現在の私の中心部分になっていると確かに思う	.403	-.033	-.092	.587	-.026	.081	.773
この出来事は私の人生の重要なテーマをよく示している	.426	-.011	-.099	.506	.014	.095	.746
この出来事と関連する他の出来事をはっきり思い出せる	-.060	.270	.100	.291	.129	-.086	.245
この出来事を思い出すと、当時と現在で自分は変わっていないと思う	-.162	-.109	.043	.279	.100	-.110	.067
<b>【F5：重要】 <math>\alpha=.952</math></b>							
この出来事は重要であると確かに思う	.286	.035	.034	.036	.755	-.063	.908
この出来事は大きな意味を持つと確かに思う	.317	.037	-.006	.025	.754	-.077	.905
<b>【F6：転機】 <math>\alpha=.916</math></b>							
この出来事は私の人生における転機だったと確かに思う	.455	-.059	.009	-.079	-.090	.700	.831
この出来事は私に大きな変化をもたらしたと確かに思う	.519	.009	.072	-.229	-.039	.673	.870
固有値	11.35	1.76	2.27	0.82	0.76	0.48	
寄与率(%)	43.65	6.76	8.73	3.14	2.90	1.84	
累積寄与率(%)	43.65	50.41	59.14	62.28	65.18	67.03	
因子間相関行列							
F1	1.000	.434	.339	.583	.555	.601	
F2		1.000	.271	.330	.420	.495	
F3			1.000	.425	.169	.201	
F4				1.000	.459	.617	
F5					1.000	.523	
F6						1.000	



表5 教師の記憶に対する評定 世代の効果

		20歳代 (n=108)	30歳代 (n=105)	40歳代 (n=89)	50歳代 (n=92)	世代の効果 (F値)
鮮明度	平均	5.63	5.72	5.62	5.52	0.36
	SD	1.32	1.33	1.33	1.46	
詳細度	平均	5.43	5.27	5.29	5.25	0.31
	SD	1.36	1.53	1.38	1.57	
感情価	平均	4.01	3.76	3.87	4.13	0.49
	SD	2.40	2.30	2.32	2.13	
感情強度	平均	4.74	4.65	4.55	4.72	0.25
	SD	1.59	1.71	1.72	1.67	
教訓・成長因子	平均	4.61	4.78	4.69	4.78	0.30
	SD	1.47	1.46	1.52	1.48	
リハーサル因子	平均	4.90	4.78	4.85	4.55	0.86
	SD	1.66	1.58	1.58	1.62	
過去の自己因子	平均	5.19	4.75	4.71	5.06	2.33
	SD	1.53	1.46	1.78	1.37	
現在の自己因子	平均	3.74	3.99	4.02	4.30	2.33
	SD	1.44	1.47	1.61	1.36	
重要因子	平均	4.85	5.00	4.84	4.85	2.39
	SD	1.91	1.72	1.82	1.80	
転機因子	平均	3.92	4.19	4.11	3.84	0.19
	SD	1.91	1.81	1.94	1.79	

表6 家族の記憶に対する評定 世代の効果

		20歳代 (n=108)	30歳代 (n=105)	40歳代 (=89)	50歳代 (n=92)	世代の効果 (F値)
鮮明度	平均	5.06	4.95	5.17	5.38	1.16
	SD	1.63	1.86	1.63	1.50	
詳細度	平均	4.67	4.73	4.78	5.00	0.71
	SD	1.62	1.83	1.64	1.66	
感情価	平均	3.83	3.84	3.85	3.79	0.01
	SD	2.36	2.27	2.29	2.18	
感情強度	平均	4.54	4.15	4.61	4.49	1.53
	SD	1.58	1.75	1.61	1.61	
教訓・成長因子	平均	4.63	4.93	4.96	4.89	1.24
	SD	1.39	1.44	1.26	1.42	
リハーサル因子	平均	4.63	4.61	4.47	4.77	0.47
	SD	1.79	1.63	1.76	1.42	
過去の自己因子	平均	5.06	4.72	5.06	5.01	1.19
	SD	1.42	1.56	1.51	1.48	
現在の自己因子	平均	3.84	4.25	4.20	4.41	2.93*
	SD	1.29	1.50	1.40	1.54	
重要因子	平均	4.81	5.01	4.89	4.92	0.25
	SD	1.73	1.88	1.61	1.69	
転機因子	平均	4.19	4.27	4.22	4.29	0.07
	SD	1.94	1.82	1.72	1.77	

\* p&lt;.05

表7 感情価・感情強度と各因子の平均評定との相関

	因子					
	教訓・成長	リハーサル	過去の自己	現在の自己	重要	転機
教師の記憶						
感情価との相関	.258**	-.223**	.097	.303**	.247**	.208**
(強度を制御した偏相関)	.158**	-.356**	.042	.215**	.120*	.113*
感情強度との相関	.470**	.365**	.221**	.442**	.582**	.415**
(感情価を制御した偏相関)	.431**	.451**	.203**	.394**	.553**	.382**
家族の記憶						
感情価との相関	.149**	-.179**	-.021	.200**	.196**	.078
(強度を制御した偏相関)	.001	-.096	-.085	.071	-.036	.009
感情強度との相関	.491**	.344**	.232**	.455**	.533**	.363**
(感情価を制御した偏相関)	.256**	.290**	.140**	.203**	.234**	.229**

n=394 \*\* p&lt;.01 \* p&lt;.05

表8 (a) 教師の記憶に対する自伝的推論と TIPI-J との相関

	外向性	協調性	勤勉性	神経症傾向	開放性
教訓・成長	-.006	-.092	-.048	.001	.026
リハーサル	.053	-.131**	-.034	-.010	.018
過去の自己	.032	.000	-.081	.026	-.020
現在の自己	.009	-.034	-.022	-.017	-.007
重要	-.016	-.115*	-.048	.029	.037
転機	-.028	-.072	-.006	-.037	.004

表8 (b) 家族の記憶に対する自伝的推論と TIPI-J との相関

	外向性	協調性	勤勉性	神経症傾向	開放性
教訓・成長	-.051	.044	.010	-.011	-.055
リハーサル	.047	-.036	-.005	.007	-.034
過去の自己	.019	.060	-.102*	.011	-.017
現在の自己	-.001	.068	.050	-.030	.032
重要	-.047	.033	-.031	.019	.025
転機	-.059	-.019	-.053	.090	-.005

n=394 \* p&lt;.05 \*\* p&lt;.01

#### 4. 感情と自伝的推論

教師の記憶と家族の記憶のそれぞれについて、因子ごとの評定平均と感情価・感情強度との相関を求めた。結果を表7に示す。

感情価とリハーサル因子との間には、弱い負の相関が認められた。これは、ネガティブな出来事の方が、その後のリハーサルや熟考を引き起こしやすいことを示している。一方、自伝的推論の内容に該当する5つの因子については、感情価と評定値との間に弱い正の相関が認められた。これはネガティブな

出来事よりもポジティブな出来事の方が、意味づけられやすいことを示している。

感情強度と6つの因子の平均評定値との間には、中程度の相関が認められた。これは、強い感情を伴って想起される出来事に対して、活発な自伝的推論が行われることを示している。

なお偏相関の結果も併せるならば、感情価・感情強度と自伝的推論の関連は、家族よりも教師の記憶でより明確に認められると言える。



## 6. 自伝的推論の6因子とTIPI-Jとの相関

自伝的推論の6因子それぞれの平均評定値と、TIPI-Jで検討した性格特性5因子との相関を表8(a)・表8(b)に示す。教師の記憶についても家族の記憶についても、自伝的推論とTIPI-Jとの間には、きわめて弱い相関しか認められなかった。

## 4 考 察

本研究は、佐藤(2014)の提案した枠組を用いて、教職志望動機、世代、感情、パーソナリティと自伝的推論との関連を検討した。以下、主要な結果に即して考察する。

### 1. 自伝的推論の因子構造

佐藤(2014)が諸研究に基づいて設定した26項目について因子分析を行ったところ、教訓・成長、リハーサル、過去の自己、現在の自己、重要、転機、という6因子から構成されるものとして解釈された。

佐藤(2014)の提案した枠組と因子分析結果との対応を表1に示す。佐藤(2014)は自伝的推論を、「内容」と「過程」の二面から整理していた。見出された因子のうち、リハーサル因子は「過程」に、他の5因子は「内容」に該当する。

佐藤(2014)では自伝的推論の内容はさらに、(1)自分にとってその出来事が重要であるという認識、(2)ある出来事が自己とつながっているという認識、(3)複数の出来事がつながっているという認識、に分けられた。(1)に該当するのが、本研究での重要因子である。(2)に該当するのが、教訓・成長、過去の自己、現在の自己、転機の4つの因子である。

このように本研究の結果は、佐藤(2014)が先行研究を踏まえて提案した枠組と整合すると言える。しかしいくつかの課題も残った。第一に、佐藤(2014)では、自伝的推論の一つとして「複数の出来事がつながっているという認識」をあげていたが、一つの因子としては抽出されなかった。第二に、心的外傷後成長の研究では、「侵入的な思考やリハーサル」と「意図的な熟考」が区別され、後者の方が心的外傷

後成長と強く結びつくことが指摘されている(Taku, Calhoun, Cann, & Tedeschi, 2008; Taku, Cann, Tedeschi, & Calhoun, 2009)。しかしこれら2種類のリハーサルが本研究では因子として区別されなかった。こうした課題を踏まえて、より適切な尺度を検討することが必要である。

### 2. 動機と自伝的推論

教職志望の強さと教師の記憶に対する自伝的推論(教訓・成長因子、リハーサル因子、過去の自己因子、現在の自己因子)との間に、つながりが見出された。

30歳代で教職志望の強かった人は弱かった人に比べると、現在の自己因子の評定値が高く、すなわち、当時の教師とのコミュニケーションが今の自分とつながっていると認識していた。50歳代で教職志望の強かった人は弱かった人に比べると、教訓・成長因子、過去の自己因子の評定値が高かった。すなわち、当時の教師とのコミュニケーションから何かを学んだり影響を受けて成長した、その出来事は当時の自分をよく表している、と認識していた。またリハーサル因子の評定値も高く、経験した当時から現在まで、頻繁に想起する傾向があった。

ただし、こうしたつながりは、30歳代と50歳代とで見出されたに過ぎず、先行研究(佐藤・清水, 2012, 2013)に比べると、教職志望の効果はクリアとは言えない。また教職志望と自伝的推論の間につながりがあるにしても、両者がつながるプロセスの詳細は不明である。例えば、(1)教職を強く志望していた人は教師とのコミュニケーションを意味づける傾向が強かった、(2)教師とのコミュニケーションを積極的に意味づけたことが教職志望につながった、(3)現在の職務の中で過去の教師とのやりとりを想起し意味づけることが多い人が「自分は学生時代から教職を志望していた」と再構成的に評定した、等の可能性が考えられる。また、因子によって、教職志望とつながるプロセスも異なるであろう。

本研究では教職志望の強さのみを問うて参加者を分類した。また、大学生には現在の教職志望、現職教員には大学時点での教職志望を問うており、同じ

「教職志望」でも意味するところは世代によって異なっていた。今後はどの世代でも現時点に限定して教職への自己関与や職業アイデンティティを検討し、自伝的推論との関わりを調べる必要があるであろう。

### 3. 世代と自伝的推論

世代の効果はきわめて限定的であり、家族の記憶に対する評定のうち「現在の自己因子」で、50歳代の参加者の評定値が高いという結果が得られたに過ぎなかった。従って、教師の記憶についても家族の記憶についても、世代が上がるに従って自伝的推論が活発になるとは言えない。表2にも示した通り、青年期～老年期までの範囲で自伝的推論の変化を検討した研究は少なく、その方法も評定法であったり内容分析であったりするため、一定の知見が得られているとは言いがたい。

世代や加齢の影響を検討する際、評定法を用いるか内容分析を用いるかという手続き上の差異が、結果に影響する可能性がある。高齢者の想起の特徴として、課題として求められている出来事を想起するだけでなく、それに関連する内容に想起がそれたり、また、解釈が加えられることが多い(Adams, 1991; Adams, Labouvie-Vief, Hobart, & Dorosz, 1990; James, Burke, Austin, & Hulme, 1998)。こうした想起や解釈はその中に、自伝的推論を含んでいるとも言える。すると、内容分析の手法を用いる場合、評定法に比べると、高齢者の自伝的推論を過大評価する可能性がある(あるいは評定法では過小評価しているのかもしれない)。Pasupathi & Mansour (2006)も、ストーリーテリングが巧みになることが、加齢と共に自伝的推論が増える一つの要因ではないかと指摘している。

### 4. 感情と自伝的推論

想起時の感情強度が、自伝的推論と結びついていた。すなわち、強い感情を伴って想起される出来事に対して、活発な自伝的推論が行われることが示された。このことは、心的外傷後成長のモデル(Calhoun & Tedeschi, 2006)が指摘するところと整合す

る。

しかし、本研究で活発な自伝的推論を導いたのは、ネガティブな出来事ではなかった。確かに感情価とリハーサル因子の間には負の相関があり、ネガティブな出来事の方が繰り返し想起されやすかった。ところが、自伝的推論の内容に関わる因子の評定値と感情価の間には、正の相関が見られたのである。このことは、ネガティブな出来事よりもポジティブな出来事の方が、相対的にわずかな自伝的推論の過程を経るだけで意味づけされることを示唆している。

これまでの研究では、ネガティブな、あるいは外傷的な出来事への意味づけが検討され、強調されてきた。しかし人はポジティブな出来事にも自伝的推論を加え、そこに意味を見出すのである(佐藤・清水, 2012)。心的外傷後成長を研究しているTedeschi & Calhoun (2004)も、ピーク体験のようにきわめてポジティブな経験も成長につながるのではないかと示唆している。またAnderson & Lopez-Baez (2008)は大学生を対象にPTGIを用い、1学期の間にPTGIに示したような変化があったかを問うた。その結果、「外傷後」でなくとも成長を実感できること、またネガティブな経験ではなく、ポジティブな経験も成長につながる可能性があると指摘している。ポジティブな出来事への意味づけや自伝的推論については、今後も引き続き検討する必要がある。

### 5. パーソナリティと自伝的推論

自伝的推論の6因子とTIPIで測定した5因子との相関を検討した。因子間相関は $-0.13 \sim 0.09$ であり、有意な相関はほとんど認められなかった。5因子とPTGIとの相関を検討した先行研究(玉腰, 2012; Tedeschi & Calhoun, 1996)でも、強い相関は報告されていない。

自伝的推論を個人差として捉えようとする場合、二通りの個人差を区別する必要があるかもしれない。一つは、日常的にどのくらいの頻度で自伝的推論を行っているかという、性格特性としての「自伝的推論傾向」である。これは日常的に自伝的記憶を想起する頻度や、自己を内省する傾向(神谷, 2013)と関連があると予測される。もう一つは、その場の

状況や課題への対応として、どの程度の自伝的推論を行うかという個人差である。日頃は余り自伝的推論を行わない人でも、状況や想起内容によっては、強い自伝的推論が喚起されるかもしれない。こういった点も含めて、自伝的推論とパーソナリティとの関連は、今後の検討課題である。

#### 引用文献

- Adams, C. (1991). Qualitative age differences in memory for text: A life-span developmental perspective. *Psychology and Aging*, *6*, 323-336.
- Adams, C., Labouvie-Vief, G., Hobart, C. J., & Dorosz, M. (1990). Adult age group differences in story recall style. *Journal of Gerontology: Psychological Sciences*, *45*, P17-27.
- Anderson, W. P., & Lopez-Baez, S. I. (2008). Measuring growth with the Posttraumatic Growth Inventory. *Measurement and Evaluation in Counseling and Development*, *40*, 215-227.
- Berntsen, D., & Rubin, D. C. (2006). The centrality of event scale: A measure of integrating a trauma into one's identity and its relation to post-traumatic stress disorder symptoms. *Behaviour Research and Therapy*, *44*, 219-231.
- Bluck, S., & Alea, N. (2011). Crafting the TALE: Construction of a measure to assess the functions of autobiographical remembering. *Memory*, *19*, 470-486.
- Bluck, S., & Glück, J. (2004). Making things better and learning a lesson: Experiencing wisdom across the life-span. *Journal of Personality*, *72*, 543-572.
- Bluck, S., & Habermas, T. (2000). The life story schema. *Motivation and Emotion*, *24*, 121-147.
- Bluck, S., & Habermas, T. (2001). Extending the study of autobiographical memory: Thinking back about life across the life span. *Review of General Psychology*, *5*, 135-147.
- Calhoun, L. G., & Tedeschi, R. G. (2006). The foundations of posttraumatic growth: An expanded framework. In L. G. Calhoun & R. G. Tedeschi (Eds.) *Handbook of posttraumatic growth: Research and practice*. Mahwah, NJ: Psychology Press. Pp.3-23.
- Habermas, T. (2011). Autobiographical reasoning: Arguing and narrating from a biographical perspective. *New Directions for Child and Adolescent Development*, *131*, 1-17.
- Habermas, T., & Bluck, S. (2000). Getting a life: The emergence of life story in adolescence. *Psychological Bulletin*, *126*, 748-769.
- Harris, C. B., Rasmussen, A. S., & Berntsen, D. (2013). The functions of autobiographical memory: An integrative approach. *Memory*, *22*, 559-581.
- 堀田 亮・杉江 征 (2012). ストレスフルな体験の意味づけに関連する研究の動向 筑波大学心理学研究, *44*, 113-122.
- 堀田 亮・杉江 征 (2013). 挫折体験の意味づけが自己概念の変容に与える影響 心理学研究, *84*, 408-418.
- James, L. E., Burke, D. M., Austin, A., & Hulme, E. (1998). Production and perception of "verbosity" in younger and older adults. *Psychology and Aging*, *13*, 355-367.
- 神谷俊次 (2013). 内省志向と繰り返し想起される不随意記憶 日本心理学会第77回大会発表論文集, p.747.
- 川島大輔 (2008). 意味再構成理論の現状と課題—死別による悲嘆における意味の探究— 心理学評論, *51*, 485-499.
- McAdams, D. P. (2001). The psychology of life stories. *Review of General Psychology*, *5*, 100-122.
- McLean, K. C. (2008). Stories of the young and the old: Personal continuity and narrative identity. *Developmental Psychology*, *44*, 254-264.
- McLean, K. C., & Pasupathi, M. (2011). Old, new, borrowed, blue? The emergence and retention of personal meaning in autobiographical storytelling. *Journal of Personality*, *79*, 135-163.
- 野村信威 (2008). 高齢者における回想と自伝的記憶 佐藤浩一・越智啓太・下島裕美 (編著) 自伝的記憶の心理学 北大路書房 Pp.163-174.
- 落合 務・小口孝司 (2013). 日本語版 TALE 尺度の作成および信頼性と妥当性の検討 心理学研究, *84*, 508-514.
- 落合 勉・竹田葉留美・小口孝司 (2013). 性別・年代からみた自伝的記憶の機能 立教大学心理学研究, *55*, 1-8.
- 小塩真司・阿部晋吾・カトローニ ピノ (2012). 日本語版 Ten Item Personality Inventory (TIPI-J) 作成の試み パーソナリティ心理学研究, *21*, 40-52.
- Park, C. L. (2010). Making sense of the meaning literature: An integrative review of meaning making and its effects on adjustment to stressful life events. *Psychological Bulletin*, *136*, 257-301.
- Pasupathi, M., & Mansour, E. (2006). Adult age differences in autobiographical reasoning in narratives. *Developmental Psychology*, *42*, 798-808.
- Pratt, M. W., Norris, J. E., & Arnold, M. L. (1999). Generativity and moral development as predictors of value-socialization narratives for young persons across the

- adult life span : From lessons learned to stories shared. *Psychology and Aging*, **14**, 414-426.
- 佐藤浩一 (2008). 自伝的記憶の構造と機能 風間書房.
- 佐藤浩一 (2014). 自伝的推論—概念ならびに評価方法の整理と包括的な枠組みの提案— 群馬大学教育学部紀要 人文・社会科学編, **63**, 129-148.
- 佐藤浩一・清水寛之 (2012). 中学校時代の教師に関する自伝的記憶：日常的な出来事に対する自伝的推論の検討 認知心理学研究, **10**, 13-27.
- 佐藤浩一・清水寛之 (2013). 現職教員における過去の教職志望と自伝的記憶との関連—記憶特性と想起内容の分析を通して— 群馬大学教育学部紀要 人文・社会科学編, **62**, 147-156.
- Singer, J. A., & Bluck, S. (2001). New perspectives on autobiographical memory: The integration of narrative processing and autobiographical reasoning. *Review of General Psychology*, **5**, 91-99.
- 宅香奈子 (2014). 悲しみから人が成長するとき—PTG 風間書房.
- Taku, K., Calhoun, L. G., Cann, A., & Tedeschi, R. G. (2008). The role of rumination in the coexistence of distress and posttraumatic growth among bereaved Japanese university students. *Death Studies*, **32**, 428-444.
- Taku, K., Cann, A., Tedeschi, R. G., & Calhoun, L. G. (2009). Intrusive versus deliberate rumination in posttraumatic growth across US and Japanese samples. *Anxiety, Stress & Coping*, **22**, 129-136.
- 玉腰歩実 (2012). 心的外傷後成長 (Posttraumatic Growth) の向上に影響する要因の研究 国際人間学フォーラム, **8**, 121-122.
- Tedeschi, R. G., & Calhoun, L. G. (1996). The posttraumatic growth inventory: Measuring the positive legacy of trauma. *Journal of Traumatic Stress*, **9**, 455-471.
- Tedeschi, R. G., & Calhoun, L. G. (2004). The posttraumatic growth: Conceptual foundations and empirical evidence. *Psychological Inquiry*, **15**, 1-18.
- やまだようこ (2013). ライフストーリー 日本発達心理学会 (編) 発達心理学事典 丸善出版 Pp.20-21.
- (注) 本研究は JSPS 科研費 25380870 の助成を受けたものです。